

Title	聖徳太子と法王帝説
Sub Title	Shotoku Taishi and the Hooteisetsu
Author	林, 幹彌(Hayashi, Mikiya)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2002
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.37 (2002.) ,p.61- 81
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	神田寺記念公開講座「書物と日本仏教」第三回(二〇〇二年十二月六日)
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20020000-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

聖徳太子と法王帝説

林 幹 彌

ご丁寧な紹介をいただきまして恐縮しています。林でございます。どうぞよろしく。

歳が八十近くなりました、だんだんぼけてまいりまして、仕事が全部なくなるとどういうことになるかと思っております。ともかく聖徳太子のことを、今までやりかけたものを全部まとめてみようと思つて、二度目の大学を七十四の歳に辞めまして、それから今までは五年間ですか。毎日書かなくてもいいものを書いておりまして、二度、三度と書くようなことがあると思うのですが。それをぼちぼち清書しようかなと思つていたときに、斯道文庫の大沼先生からお話しがありました、それではと思つてやり始めたのですが。

ちよつと大げさなことを言いますと、その五年間で書いた原稿の目方を量つたら二十キロというんです。二十キロも原稿を書く馬鹿もいないだろうと思つていますが。パソコンでやりますと、だぶつたところもあつたりして非常に不揃いなのですが、ともかくやってみようと思つておるところです。それがいつできるか。そしてそれができたとき、家内が始終言うように、私はともかく整理が悪い。そのため買った本はどこへ行つちやつたんだかすぐわから

なくなるものなんです。その一つが、『法王帝説』の古典保存会本が、あそこで複製になったものをいい具合に史料（史料編纂所）へ入ってから手に入ったものですから、それをもとにしてやっていたんです。

ところがここへ来て、それがまたどこかへ行っちゃったかわからない。それで、斯道文庫の先生にご迷惑を掛けていたのですが。

その『法王帝説』というのが、最近亡くなりました家永三郎先生が『上宮聖徳法王帝説の研究』というのを一冊。これが各論編で、そして、これから大分たつて総論編をお出しになって、その後その二冊を一冊にして再版したのですが、その中に『法王帝説』のことは、言ってみれば非常に細かに書かれていて、我々なんか足元にも及ばない本なのですが。

この本ができましたとき、昭和二十六年といえますから、五十年以上も前の頃に出たんです。それはちょうど私が史料編纂所に入りまして図書係という部署に所属して、本の出し入れをしまして、いい具合に内閣文庫の本と史料編纂所というのは非常に関係があるものですから、内閣文庫の本を借り出す係になっていたんです。

そこで、何も家永先生とチャンバラをする気はなかったのですが、ともかく何かやらなきゃ具合が悪いと思って、内閣文庫にある聖徳太子伝を片っ端から借りてきまして、その中に『法王帝説』という引用が、家永先生の言われているような引用がどのくらいあるのか、ないのかという—今そういう細かなことはしません—細かなことをしました。そうしたら、『法王帝説』という本は、よその本なんかで見ると、『太子伝』なんかでは『上宮聖徳法王帝記』という名前で引用されているというんです。

そこで問題が起こるんです。田中重久という人が—早稲田を出た人ですが、ご存じの方もおるだろうと思うのです

が―『上宮聖徳法王帝説』は、その前に『上宮聖徳法王帝記』があつて、それに注釈なんかを加えた物が『法王帝説』になつたのだということを発表した。この方はもともと関西の方ですが、大阪か京都におられて、そしてそういうことを発表されたんです。

そうすると、それは甚だ理に叶つたことで。私の部屋に太田晶二郎というおつかない先生がいまして、この説を認めていました。

その太田晶二郎さんが、田中重久氏の説はいいんじゃないかという話をしておられたんです。そして、私が内閣文庫から借り出した『聖徳太子傳』の中で『法王帝説』の記事があるかということも挙げていったのですが。

そうすると、こういうことがあつたんです。太田晶二郎という人が、田中重久さんと言うことは同じだ。要するに『法王帝説』は『法王帝記』の、わかりやすく言えば増補版だということも言つたわけです。ところが私が見つけてきた『法王帝説』の文章の中には、その人たちが増補版と言つたものが、ちゃんと『法王帝記』と書いてある。そうすると、『法王帝記』が先で、そしてそれに注釈を加えたものが『法王帝説』だという説が成り立たなくなるだろうということなんです。そのときは太田さん気持ち悪かつたでしょうね。

それをやって、そしてちょうどいい具合に、『歴史地理』という雑誌が戦前からありまして、それは史学雑誌と二つ併せて日本の国史の論文集、雑誌だと言われている。その『歴史地理』が終戦後ずっと長いこと復刊していません。それを復刊するという話があつて、第一冊がともかく出た。第二冊をどうするかというと、カネがないから他の論文も集まつてこないのです。そうすると、そのの理事をやつていた、もう死んでしまいました、菊地勇次郎というのが、「お前、何か書いたのがあるだろう？」と言うから、「ないことはないよ」と言つたら、「それではお

前、書け」と言われて、それで二冊目に編集者と私の「上宮聖徳法王帝記と上宮聖徳法王帝説」が名前を連ねたわけです。

ともかくそうして出しましたら、それが家永三郎さんのお目にとまって、そして『法王帝説』の二冊目、総論編に私の論文を、一番最後の所に私の論文の要旨をページ半ぐらいで載せてくれたんです。そして、本当は自分の本も時間があれば林の論文の中に入れてやるべきなんだが、印刷もほとんど終わっちゃってるんだから、今は後の方に置くから、我慢してくれ、というようなことを言ってくださったんです。

そうすると、それをもたらすたりますます天狗になるといふか、いい気持ちになって、聖徳太子は『法王帝説』だけぐらいのことしか考えていなかったのですが、その後一所懸命勉強すればもつと偉くなったのでしようが。それからしばらくして、早稲田大学へ非常勤講師で行ったんです。そうしたら、昼間は小学校の先生で、夜は私の授業を聞いている女性の学生がいます、その学生と話したあと一杯飲んでいたら、「先生というのは若い頃から偉いんですね」と言うから、「ああ、俺は偉いんだよ」と言っておったような時代が若い頃の思い出として残っておりますが、その思い出が『法王帝説』であったことになりましたか。

さてそれで、『法王帝説』というのはどういう本かといひますと、これは法隆寺の寺内だけで広がっていったといふんです。よその人でこれを見るといふのは、江戸時代ぐらいまでは、狩谷掖斎はまあまあ、ともかく室町時代まではよその人がこれを利用することは絶えてなかったんだ、といひて、そしてこれが『群書類従』の中に採用されて、それから非常に普及し、狩谷掖斎がこれの證注本を作って、そして、「法王帝説一卷。不知作者名氏」。法王帝説一卷作者名氏知らず云々とあつて、「頗類釋日本紀所引上宮記。要之」釋日本紀が引いている「上宮記」と非常によく似

ている。「似未見古事記・日本紀者之所作」。だからまだ『古事記』『日本書紀』を見ない者が作ったんだ。こういうことが書いてある。これは家永さんも言われましたが。これは、『古事記』『日本書紀』や何かの前に作られたんだという話ではないというわけです。ただ、『古事記』『日本書紀』を見ない人が作った話だろうということが書いてある。そうすると、ちよつと早とちりをした人なんかは、聖徳太子の伝記を集めて出版します。そうすると、『法王帝説』を『日本書紀』『古事記』の前に出すということをやっている人が、『聖徳太子全集』という本が上下で二冊になっていますが——名前を言っても悪いから、そのくらいに。人の話ばかり言っているものですからろくな事はないわけです。

ともかくそれで、『法王帝説』が流布した。そしてその後狩谷掖斎が證注本を作る。その後明治になって、平子鐸嶺という人。これは美術学校を卒業した人で、『法王帝説』の研究をやったんです。この人がものすごくいい仕事をします。

その署名の狩谷望之というのは狩谷掖斎のことで、平子鐸嶺というのは明治になってから美術学校を出た人が聖徳太子のことを研究したんです。最後は肺病で死んだ人です。それで法隆寺再建・非再建論なんかでものすごく活躍した人です。この人が『法王帝説』の證注本を増補した。こういうことです。

そして、この『法王帝説』というのは——下谷の御徒町ご存じですか？東京の方だけだと思っただけで、御成り道というのがあります。芝公園からまっすぐ上野の方へ行く道に近い所で私は生まれまして、空襲で今の所へ引っ越したのですが。それで史料編纂所におりますと、昼飯食って部屋にいたって偉い人ばかりですから、そんな所にいたって、しょうがないということはないけど、上野の辺りを散歩しながら古本屋で安そうなものを漁っていたら、当時の

金で二百円か三百円で『法王帝説』の證注本が手に入ったんです。その奥書は次の通りです。

予嚮写^(宋)聖徳法王帝説及補闕記。以下其古書、有益^レ于史学、聊加^レ傍注、間者見^レ符谷望之證注稿本^(一)。其攷證精詳甚當、但塗抹増損、使^レ人難^レ読。即課^レ人臨^レ写一本。就^レ本文及注文引書、頗正^レ誤脱。聊加^レ管見^(一)。朱駢随有^レ加之、要不^レ混^レ于本稿耳、後來若得^レ見^レ定本^(一)者、則為^レ幸也、信友

右聖徳法王帝説。雖以常陸国人色川某所藏本謄写。頗有訛謬。仍以源信友所藏稿本比較之、而加^(釋)僻案了、

藤原春村

弘化三年七月四日

嘉永^(釋)六年十二月十四日、以縁山徹定寮所藏古鈔本。更加考訂訖、春村案。嚮符谷氏所採之本、並有誤脱之本也、以今書當謂眞本者歟。可尊々々、

文久^(宋)二二季歲在甲子四月、以久米幹文藏本書写畢、原本頗有誤写、他日可加校正者也、

喚犬喚鷄之舍主人

間宮永好（花押）

黒川春村・伴信友・間宮永好、こういう人たちが注釈しているんです。

これは私の所蔵本の奥書のことです。これを見ると、『法王帝説』が多くの人たちの注目するところとなった、ということが理解できるでしょう。

それで、最後には、芝の増上寺の住職鵜飼徹定が法隆寺へ行つて、『法王帝説』を手に入れたんです。そして増上寺に入った。家蔵本の奥書を見ると、黒川春村は、増上寺で『法王帝説』の原本を見ていることになるわけです。や

がて徹底が知恩院の管長になったんです。そうすると、『法王帝説』も一緒に知恩院へ行つて、そして今、この『法王帝説』の原本は『知恩院本法王帝説』と言われているんです。そういうことで法隆寺の、知恩院本と言っています。そういう伝来があった。そして、この本の後にありますように傳得僧相慶。これは法隆寺の坊さんです。その後が、これが昔はこの自署がわからなかったのですが、これが千夏（せんか）という坊さんのことだということなんです。千夏が平安時代の中頃か末頃か、日本に末法が来たことで大騒ぎした時代と、ちょうど新仏教ができた頃に千夏が聖徳太子の、この史料集を一二〇〇年頃まとめて、そして法隆寺に置いておいた。それを相慶という法隆寺の坊さんが貰ったか買ったか、それはわかりませんが、ともかく相慶の手に入ったということなんです。

そうすると、これはともかく法隆寺でできたもので、家永さんが言われたように、法隆寺しか普及しなかったということは大体わかるのですが、屁理屈を言う私のようなやつがそんなこと言ったって、そういうことはないよというようなことになるわけです。

そして、『法王帝説』というのは何で普及したかという点、これは『古事記』や『日本書紀』を見たことない人だとか、それから、古い字が使われているとか、音が書かれているのですが、そういうことがありまして、そして中に中宮寺の天寿国繡帳の銘文が『法王帝説』でしかわからないです。だから天寿国繡帳をやるについては、これをもとにしなければならぬ。もう一つ宮内庁書陵部にありましたが、これが主になつてゐるわけです。

そして、そのほかに、聖徳太子の一族の名前とかいろいろと、蘇我・物部戦争とか、仏教伝来。そういうことが史料として見えています。『聖徳太子傳暦』や何かのように、面白い話は無い。だけど、材料として使えることがこの史料には非常に多いということです。

そして、『法王帝説』の中に、法隆寺の薬師像、金堂の釈迦三尊像の銘文をそのまま引いてある。

その銘文は、

池辺大宮御宇天皇、大御身勞賜時、〔用明元年〕歲次丙午年、召於〔推古〕大王天皇・太子而誓願賜、我大御病太平欲坐故、將寺藥師像作仕奉詔、然當時崩賜、造不堪者、少治田大宮御宇大王天皇及東宮聖王、大命受賜而〔推古十五年〕歲次丁卯年仕奉、
そのあとに、

法興元世〔推古〕一年歲次辛巳十二月、鬼前太后崩、明年正月廿二日、上宮法王、枕病弗愈、干食王后、仍以勞疾、並著於床、時王后王子等、及〔推古〕国臣、深懷愁毒、共相發願、仰依三宝、当造釈像尺寸王身、蒙此願力、軫病延壽、安住世間、若是定業、以背世者、往登淨土早昇妙果、二月廿一日癸酉、王后即世、翌日法王登遐、癸未年三月中、如願欲造釈迦尊像并使侍及莊嚴具、竟乘斯微福信道知識、現在安隱、出生入死、隨奉三主、紹隆三宝、遂共彼岸、普遍六道、法界含識、得脫苦緣、同趣菩提、使司馬鞍首止利仏師造、

と、釈迦像の光背銘が引用されている。『書紀』その他の史料では、太子の父は用明、母は同じく欽明の小姉君の女穴太部間人（あなほべのはじひと）、という。しかし、薬師像の銘には母穴太部間人の名は見えず、釈迦三尊像の銘には父用明の名は見えず、母間人王は、同母弟崇峻すなわちササキと共に居た、ということになっています。

そして、釈迦像の銘には、次の注釈が加えられている。

釈曰、法興元世一年、此能不知也、但案帝記云、少治田天皇之世、東宮厩戸豊聡耳命・大臣宗我馬子宿祢、共平章而建立三宝、始興大寺、故曰法興元世也、此即銘云、法興元世一年也、後見人、若可擬年号、此不然也、然則言一年字、其意難見、然所見者、聖王母穴太部王薨逝辛巳年者、即少治田天皇御世、故即指其年、故云一

年、其无異趣、鬼前大后者、即聖王母穴太部間人王也、云鬼前者此神也、何故言神前皇后者、此皇后同母弟長谷部天皇、石寸神前宮治天下、若疑、其姉穴太部王、即其宮坐故、稱神前皇后也、言明年者、即壬午年也、二月廿一日癸酉、王后即世者、此即聖王妻膳大刀自也、二月廿一日者、壬午年二月也、翌日法王登遐者、即上宮聖王也、即世・登遐者、是即死之異名也、故今依此銘文、応言壬午年正月廿二日聖王枕病也、即同時膳大刀自得勞也、大刀自者、二月廿一日卒也、聖王廿二日薨也、是以明知、膳夫人先日卒也、聖王後日薨也、則證歌曰、伊我苗我乃止美能井乃美豆伊加奈久尔多義氏麻之母乃止美乃并能美豆

是歌者、膳夫人臥病而將臨没時乞水、然聖王不許、遂夫人卒也、即聖王誄而詠是歌、即其證也、但銘文意顯夫人卒日也、不注聖王薨年月也、然諸記文分明云、壬午年二月廿二日甲戌夜半、上宮聖王薨逝也、出生入死者、若其往反所生之辭也、三主者、若疑神前大后・上宮聖王・膳夫人、合此三所也、

そこで、父の欽明と崇峻・穴太部間人の年令を見ていくと、意外なことに突き当たると。

崇峻五年（五九二）に暗殺されたと『書紀』がいう崇峻は、『扶桑略記』や『年代記』に拠れば当時七三歳という。その崇峻の父欽明は六三歳で亡くなったという。欽明の死後、敏達が一四年、用明が二年、そして崇峻が五年、という在位年数を加えると、欽明がかりに崇峻の没年まで生きていたら八四歳ということになり、親子の年齢差は一一ということ、両者父子関係は難しいことになる。そのうえ、崇峻の姉穴太部間人は、七二歳で暗殺された崇峻の没後二九年も生きていた（釈迦三尊像光背銘）。すると彼女は一〇〇歳を超えて亡くなったことになる。そうになると、穴太部間人と崇峻との姉弟関係は無くなってくるでしょう。このように見てくると、穴太部間人・穴太部・崇峻の三人が欽明のキサキ小姉君の所生は無いことになり、おそらく、天武の史局が考えついたことになろう。すなわち、擬制

と見るよりほか理解の仕様はないでしょう。そして、二人の穴太部は湖南の天津市穴太ということになり、崇峻については、湖東の蒲生郡安土の沙々貴神社（古事記などに見える崇峻の倭名）がその居処と考えられる。そして、穴太部間人については、丹後半島の突端部、京都府竹野郡間人町が考えられる。ここには隣町の竹野神社に、加佐郡の皇太神社・豊受大神社の斎宮があり、間人の周辺には「天皇」などという小字が見えることも、この湖岸に見える三人の関わりが考えられよう。すなわち、『書紀』がいう大倭に本拠をもつという三人が、その本拠は湖岸と考えなければ、理解し難いといえる。

なぜかというところ、一番最初の所に聖徳太子の両親の事が書かれてありますが、それは用明天皇がお父さんで、お母さんは穴太部間人ということなんです。それが『日本書紀』にも書かれています。だからそれは間違いないだろうというところで、誰でも聖徳太子の両親を考えるときは、用明天皇とお母さんの穴太部間人ということになっているわけです。

ところが、面白いと言っては悪いけど、何でもけちつけるのが好きだからというわけですが、法隆寺の薬師如来像。これは昔は、法隆寺に元からあったのだと言われていたのですが、最近、ここ十年か二十年ぐらいは、天武天皇、その近くの人たちがこれをこしらえて法隆寺へ持ってきたんだという話しになっているわけです。それはあまり文句も言われていないようなんです。

それはなぜかというところ、薬師如来像は真ん中の釈迦如来像より先にできているのに様式的に非常に新しいというわけです。柔らかく作られている。それから、着物の線もゆったりしている。ところが釈迦三尊像は、おつかない顔をしている。ものすごい顔をしている。これは僕が言ったのではなくて、京都芸術大学の学長になって、この間文化勲

章を貰った梅原猛。あの人が今から十年ぐらい前、こういうことを、ものすごくいろんなことを言ったわけです。そして、聖徳太子の釈迦三尊像というのはおつかない顔をしている。その他聖徳太子についていろいろ言われているが、それはみんなちよつと珍しい仏様だ。そういう言い方をしている。だから、あれはおかしいと言ったのかな。テレビですからよく聞いていなかったのですが。そういうふうにして、これは聖徳太子の実際の姿を写した仏像だと言われているわけです。それで銘文も非常に細かに書かれていて、聖徳太子の姿がこれでわかるんだということになってい
たんです。

ところが、薬師如来像には、聖徳太子のお父さんの用明天皇が病気で、俺はもう死にそうだからと言って、妹の推古天皇と、それから、息子の聖徳太子を呼んで、そして、薬師像を作れ、そしてお寺も造れと言った。だから、二人は親父さんと兄貴の言う通りに法隆寺を造って薬師如来像を作ったということです。

すると、こういう親父が死ぬときに、お嫁さんの穴太部間人というのはここでは何も話が出てこないんです。そうすると、一体、そういう事というのはあるのかということ。あるんだからしょうがない、と言えばそれまでですけど、それもおかしいだろう。

もう一つ、釈迦三尊像の銘文には、今度は聖徳太子の親父さんの事は全然出てこなくて、叔父さんの崇峻天皇の事は書いてある。崇峻天皇の宮に聖徳太子のお母さんが行ったんだ。そこで、死んだんだという書き方をしている。そうすると、その崇峻天皇の宮というのがどこなのかということ、穴太部間人は、釈迦如来像を見ると、鬼前太后（きぜんたいこう）と書いてある。鬼というのは神だから、神前太后（かみさきのおおきさき）というふうに読めばいいんだと、釈迦三尊の注釈では書いてあるということ。ここで、今度は用明天皇の事は書いていないということです。

そうすると、聖徳太子の事についてもどっちか、何か変なんだという感じがするという事です。

そして、今度仏教伝来の後、蘇我と物部の戦争が起こります。その時聖徳太子は推古天皇に頼まれて、物部氏をやっつけてくれと言われた。そうすると聖徳太子は、難波（なんば）、今の「なにわ」です。まことに難波から攻めて行ったんだという事が、『上宮聖徳太子傳補闕記』という本に——平安時代も『傳暦』なんかより早い頃に書かれた本です——書いてある。

大臣奉勸太子、興愨軍士、眞難波自後而襲、

そうすると、それを書いた人は聖徳太子が、難波というのはどこだかわからないけど、ともかく本当に聖徳太子は難波から攻めて行ったんだという事なんです。そうすると、神前宮（かみさきのみや）があるという事は一つでした。

それから、もう一つ難波から聖徳太子が攻めて行った。そうすると、難波と言うのは周辺の弓削と言うのは物部氏の事です。要するに別の呼び方です。難波と弓削という地名が、琵琶湖に注ぐ姉川の流域にある。

それから、もう一つ、上の方です。神前宮。難波という所から聖徳太子が物部氏を攻めたんだという事です。そうすると、聖徳太子がいた所は、神前宮（かみさきのみや）で、この川をずっと下って行きますと、姉川という所で合流した高時川という川があります。高時川をどんどん上って行くと、神前宮というのがあって、その辺に聖徳太子の宮となったもので、この辺は物部という名前がたくさんあるんです。そうすると、物部氏がいた所ではなかったか。それから、物部氏を聖徳太子が攻めるのに、難波と言う所が一番都合が良かったのだから、準構造船と言う

これはなんでかといいますと、古墳時代の物ですが、この辺には新しい船が。これは埴輪ですが、準構造船と言うらしいですが、その船の埴輪がこの辺りから出ているんです。琵琶湖の縁からもこういう埴輪が出ている。この埴輪

は、五、六十人から百人ぐらい乗せられる物です。そんなに乗るんですかね。それにもう少しいろんな構造物を作つて、そしてその上に人が乗るんですが、百人ぐらいは優に乗るだろうということなんです。そうすると、聖徳太子は、難波から百人ぐらい乗れる船を何艘か仕立てて、物部の本拠を攻撃した。

それだけではなくて、難波から攻めていった時に、秦川勝と言うのはご存じですね？ 秦川勝と言うのは秦と言うんだから、着物を作るとかなんとかいう事なのですが、彼はそれだけではなくて、新羅から日本へ入ってきたんですけれど、その時に大勢の家来、自分の家来、要するに工人です。それを連れて、そしてどこへ来たかわからない。ともかく聖徳太子がいた高月町には、秦氏のお宮である丹生（にう）と云つて、仏像を作る時に金と銅の他に、それに水銀が要るわけです。皆さんご経験があるでしょうが、歯医者に行くとき金歯をします。あの金の中に錫を入れてかき回して、そして歯にくっつけて、水銀を蒸発させるんです。仏像を造る時は金が幾らたくさんあつたつて水銀が無ければできないです。秦川勝が水銀を取る手段を知つていた。そして秦川勝の先祖がいた所が聖徳太子が住んでいたのではないかと思われる高月町。高月町のこの辺りに、秦氏の宮が二つも三つもあるんです。そうすると、高月町というのは、秦川勝と関係があつたと考えたつていいだろうということ、この辺りが。そして、この中には、高時川が姉川と合流して、そして難波になるわけです。そういう所であるとすると、聖徳太子というのは、この辺にいたとすれば、聖徳太子が難波から攻めて行く時に秦川勝も一緒にいた、と考えられる。

そして大和からは、平群神手という人物が、昔からの伝説ですが、いろいろな先祖が悪い事するから、滅ぼされたんだけど、なんとか生き残つた。その頃の氏族の構成から見ればアウトローです。アウトローと呼ぶべき人たちが聖徳太子にくつつくんです。平群氏というのは、悪い事ばかりするけれども、ともかく聖徳太子は、そういう人を配下に

持つ、という人だったのでないかという感じがすることになります。そして、五十人百人は乗れる船を造る。これは一隻ではないんですから。何隻もある。その埴輪がこの辺りから数年の間に二隻か三隻出ているんです。これが今の高時川ですが、この辺りに崇峻天皇がいたのではないかという事になっています。沙々貴神社というのがこの下の安土という所にあるんです。そうすると、沙々貴神社とか、そういうお宮があつて、聖徳太子が亡くなった時、『法王帝説』に釋曰（釋して曰く）といつて、神前宮（かみさきのみや）に穴太部間人（あなほべのはじひと）がいたんだ、という話に割に近づいてくるのではなからうかという感じがするんです。

もう一つおかしなことは、『日本書紀』の注釈書で『釋日本紀』と言う本がありますが、その中に、聖徳太子が若い頃、蘇我・物部戦争が終わつた頃に、伊豫の道後の温泉へ行つたという事が書いてあるわけです。

『伊豫風土記』に、景行・仲哀の天皇が皇后同伴で伊豫の道後に旅行された。わが上宮聖徳皇子も、高麗僧惠慈・葛城臣らがお供して、前の二人の天皇と同じように道後の温泉に旅行された。そして、湯岡（射狭庭乃岡）に碑文を建てられた。その碑文は、

法興六年十月歲在丙辰、我法王大王、与惠総（惠）法師及葛城臣、逍遙夷与村、正觀神井、歎世妙驗、欲叙意、聊作碑文一首、惟夫、日月照於上而不私、神井出於下無不給、万機所以妙応、百姓所以潜扇、若乃照給無偏私、何異于壽国、随華台而開合、沐神井而瘳疹、詎升于落花池而化溺、窺望山岳之巖嶒、反冀子平之能往、椿樹相廬而穹窿、冥想五百之張蓋、臨朝啼鳥而戲吐下、何曉乱音之聒耳、丹花卷葉而映照、玉菓（ヒコツリ）弥葩以垂井、經過其下、可優遊豈悟洪濼霄庭意与才拙、実慚七步、後定君子、幸無蚩咲也、

と見えている。この法王大王の碑文は後年埋没したのですが、これにはいま見た重要な事が書いてある。その一つが、

物部戦争終結後に道後の温泉へ行つた事です。その中に、聖徳太子のことを「法王大王」と言い、これは釈迦天皇と言ふ事で、近江系の天皇と同じ系統の天皇として行動していた、ということが明確です。

その道後の温泉というのは、その隣に何があるかというところ、熱田津（ニギタツ）という所がある。熱田津という所は、外国へ行く船が停まる所なんです。

熱田津に船乗りせんと言つては潮もかなひぬ いまは漕ぎいでな

という額田王の歌があります。ああいうふうにして外国と交通の基地。

それで、またけちつけるんですが、蘇我氏でも、推古天皇でも、大和にいて海に出る道なんて無いんです。大和川つてあるじゃないかと。大和川というのはあるけれども、あんな大きくなつたのは江戸時代になってからです。江戸時代になつてから、家康が片桐且元に、あそこにある大きな石を壊せ。そして、あの川を大阪まで通じるようにしろと言つたわけです。それであの川が航行できるようになつた。昔は、あれは関西線の亀ノ瀬という所です。そこでいっぺん降りて、そして船を乗り換えないとこつち（飛鳥）へ来ないと言われます。そういう不便なことをしなければいけないので、推古天皇でも蘇我氏でも中国と交通できるわけがまず無いと考へた方が良いでしょうか。

そして、この熱田津という所から船が出るようになった。そして聖徳太子のいる所、今の高月町。この辺りから船に乗つて出るということが考えられる。だから、聖徳太子に付いて伊豫の道後へ行つた時に、聖徳太子は碑文を建てた。そして自分のことを「法王大王」と言つた。聖徳太子は、この前は「太子」だとか、そういう事を言つているのに、「法王大王」と言つたということは、「大王」というのは天皇さんという事です。そして「法王」と言つるのは何かというところ、釈迦のことを法王と言つたんです。そうすると、聖徳太子は蘇我・物部戦争の後からは、釈迦天皇と、自

分も言ったし、世間からもそう言われていたという事です。

そして、伊豫の道後。これは道後の温泉の碑というのは、すぐかどうか知りませんが、ともかく伊豫の射狭庭の岡という所に碑が建っていたのですけど、それが地震で沈んじやった。そして、聖徳太子の碑だから、掘り返そうとしたら、周りの人が、これを掘り返されたら困る、温泉が止まっちゃう。温泉が止まったら商売上がったりだからやめてくれというので、やめた話がある。だけど、その前に、『伊豫風土記』の中にこの話が載っているんです。そうすると『伊豫風土記』があればいいわけですが、その『伊豫風土記』が悪い具合に、また散逸しちゃった。わずかに残っているのが、さっきの『釋日本紀』に出ている『伊豫風土記』の逸文だと。こういう事です。だから、聖徳太子というのは割に運が悪いという事が言えるかもしれません。

そうして、この時「大王」と言って、それから十年、二十年経って聖徳太子が亡くなった時、法隆寺の釈迦三尊像の光背銘に今度は「上宮法皇と言われていた」という事が書いてあるのですが。こういうふうにして、「法皇」と言うのは釈迦天皇の事です。そうすると、聖徳太子は太子とかなんとかではなくて、天皇さんだという事です。

何でそういう事になったかという、奈良の元興寺の縁起なのですが、その元になったのが飛鳥の法興寺。推古天皇や蘇我氏が建てたという大きな釈迦三尊像がある所です。それが奈良へ移って、あれは残っているんです。それで、その奈良の元興寺の銘文が元興寺の縁起の後に、「難波の天皇の世、辛亥の年正月五日に孝徳天皇は元興寺に露盤銘をやったんだ」と書いてあるんです。露盤銘というのは、五重の塔なら五重の塔の上にある四角い箱みたいのがあって、その上に棒が立っていて、いろんなものがあるわけです。その箱みたいのに書いてあるのが露盤銘。ところが、これはそんなことではなくて、元興寺の縁起に露盤銘がくつつけてあるんだ。

そうして、この後にもっと不思議な事は、元興寺には、今言ったように丈六仏があります。「丈六仏の光背銘というのにはここにある」と書いてある。これしかないんです。そうすると、元興寺の露盤銘と光背銘というのは、元興寺の縁起にしかくついでないんだ。そうすると、露盤銘じゃないだろうし、光背銘じゃないだろうと、こう言うんです。それで、おかしいと思うのは、法起寺には露盤銘があった。だけど、それは何に書いてあったかというところ、聖徳太子の事や何かをたくさん書いてある法隆寺の顕真という坊さんの『聖徳太子傳私記』という本の中に書かれている。それしかないんです。そうすると、それしかないのなら、それでそれはあちこちおかしいから、会津八一という人がこれを復元して、そしてこの銘文はこういうものだと言うふうに言ったわけです。それは、会津さんの『法隆寺・法起寺・法輪寺建立年代の研究』という本の中に書いてあります。

上宮太子聖徳皇壬午年二月廿二日臨崩之時、於山代兄王勅御願旨、岡本宮殿宇即處傳將作寺。乃入大倭國田十
二町、近江國田卅町。至于戊戌年福亮僧正聖徳皇御分敬造彌勒像一軀構立金堂。至于乙酉年惠施僧正爲竟御願
構立寶塔丙午年三月露盤營作。

そういうふうにして銘文というのは、ある時は、それはお寺の塔の上にあったものもあるけど、それは薬師寺、粟原寺とかいろんなお寺の銘文は残っていますが。ところがこういうふうな紙に書かれた物というのはあるわけです。しかももう一つ、法隆寺では法起寺の銘文を、京都のお公家さんが法隆寺へ行つて、そしてこの銘文を書き取って帰ってくるという話があるわけです。そうすると、今いる人たちがそういう経験をご存じない方は、法隆寺へ行つて、そしてお寺の中で何が書いてあるかわからない物を持つてくるなんていうのは、これはインチキだと。だから、法起寺の三重の塔の銘文なんていうのは無かったんだと言う人もいるわけです。そういうのが果たしていいか悪いか、とい

うような事。悪いに決まってるんです。そういう事も起こってくるということですから。

そうして、こういうことが言えます。聖德太子が生まれている時に『隋書』。中国の隋のことを、ちょうど推古天皇の頃です。『隋書』の隋の歴史の中に、日本の事を書いた倭国伝の中に、「開皇二十年——推古八年、西暦六〇〇年の頃——倭王あり、姓は阿毎（あめ）、字は多利思比孤（たらしひこ）、阿鞞鷄弥（あめきみ）と号す」。というのが「使いを遣わして闕に詣る」、こういうふう書いてある。阿毎・多利思比孤（あめ・たらしひこ）というのは男の名前です。

そうすると、さつき言った勇ましい事を書く梅原猛は、当時、要するに女帝は外交はできないんだ。よそへ出ると女は恥ずかしいから、仮に男の名前にしたんだというのですが。これはそうではなくて、聖德太子が阿毎・多利思比孤（あめ・たらしひこ）の大君と言われて、その人が隋に使いを遣わした。そして、その様子を書いてあるのですが、この中に冠位十二階の事、それから、軍尼（国造）の事。そういうような事が書いてある。当時日本には、もう既に聖德太子の麾下には八十万人以上はいたのだろう。そして、内官に十二等、冠位十二階を聖德太子が既に定めているんだ。これは推古八年のことです。『日本書紀』では冠位十二階ができたのは推古十二年のことです。

そうすると、『日本書紀』に書いてあることと『隋書』と全然話が違う。大体、秦川勝だとか、平群神手だとか言うような人が物部戦争に手柄を立てた。そうしたら聖德太子は後に冠位十二階を作った時小徳をやったとかなんとかという事になっている。それから十年も経たなければ論功行賞をやらなかったというの、ちよつと話が間延びしすぎている。そうすると、これは推古八年のことだという頃は、ちよつどいいのではなかるうかということなんです。そうして、聖德太子、阿毎・多利思比孤（あめ・たらしひこ）。これはどういふことかという、『古事記』や『日

本書紀』に載っている天皇さんの名前を見ると、足彦、帯彦（たらしひこ）というような書き方をしている人が何人かいる。それはどういうことかというところ、琵琶湖のほとりにいる人たちの事。だから、聖徳太子は、そういう人たちの系統を引く人ではないかという考え方ができる。こういうわけです。そうして、聖徳太子の顔が、梅原猛氏も言っていました、ものすごくおつかない顔をしている。仏様というのは、ああいう顔は普通は見ないです。それで仏様は、この人は、今言ったように大和に住んでいたのではないんです。近江に住んでいた。そして亡くなってから、聖徳太子のもう一人の、膳部普岐々美（かしわでのほききみ）という奥さんと、蘇我系の奥さんと両方あるんです。山背大兄（やましろおおえ）というのが蘇我系の息子だ。そうすると、そっちの人たちが聖徳太子のことをこういう恐ろしい顔にしたのではないかと。そうしないと、『隋書』に出てくる怖い顔をしていたということは、そういうことを書いてある——「隋に至り、その王始めて冠を制す。錦綵を以てこれを為り」。今まであまり良い服も着ていなかったのが、隋の時になって初めて金銀を散りばめた服を着て、そして政治を執っていた、と言う事がわかりそうな気がするということですよ。

ところが『日本書紀』は、聖徳太子は十九の時に斑鳩宮から推古天皇のいる飛鳥宮へ、太子になって毎日通っていたというんです。

そうすると、こういうことがある。今の馬は大きくて力がある競馬に出るような馬です。ああいう馬は一時間に十キロ走る。それはそうでしょう。十キロぐらい走らなければどうかしちゃうわけです。だから聖徳太子の馬も十キロ走ったから、二時間で飛鳥宮へ着く。法隆寺から推古天皇の宮まで二十キロです。だから聖徳太子は太子として推古天皇の所に毎日通った。こう言っていると理屈に合いそうな気がするということですよ。

ところが、さっき言ったように、そういう当時の馬、今は聖徳太子が伊豫の道後へ行った。その近くに野間馬という馬があるんです。馬の高さが百二十センチ。そして、そんなに速く走れる馬ではないというんです。そうすると、慌てて今の馬と一緒に大ききだと思つたら大間違いで、その頃の馬というのは小さい馬だった。それへ聖徳太子が乗つていたら、二時間どころの騒ぎじゃない。今の人間とそんなに変わらない。二十キロというと四里、三時間ぐらいはかかるだろうという事になると、二時間の話というのはおかしくなってくる。

そして、もし十キロを一時間で走れるとしたら、別の問題があるんです。文句ばかり言っているけれども、この時代、大化の改新頃の天皇さんが政治を始めるのは夜中の三時か四時です。そうすると、聖徳太子が二十キロを二時間で行つたとしても、真つ暗な道を斑鳩から飛鳥まで行かなきゃいけないという事です。そんな事ができたものではないかろう。街灯なんか無いんです。そういう所へ行くというのだから、聖徳太子が太子だという話は、まずおかしい。嘘だという事で、聖徳太子は恐らく天皇さんだったのだから、それで亡くなったのは推古天皇の頃だろう。推古天皇が、孝徳の露盤銘によると、推古天皇が聖徳太子に揖命（ゆうめい）したと書いてある。聖徳太子にお願いして、そして自分の天皇さんをもう譲つたんだと言う事です。そうすると、推古天皇が、天皇さんでなければ具合が悪いから、『日本書紀』だとか、天武天皇だとか、いろいろな人がそういうわけで、聖徳太子はもう天皇さんだったというふうに考えないと話がおかしい。だけど、聖徳太子は早く、四十九歳で亡くなったから。そうすると、その後誰が来る。今度は聖徳太子の時に太子だったという人。それは推古天皇の次の舒明天皇が太子だったわけです。その舒明天皇が聖徳太子に頼まれて、そして法起寺を造つた時、聖徳太子は、今まで聖徳太子については法皇とか、法王大王とかいうふうには天皇と言っていたのを舒明天皇は、上宮太子聖徳皇と初めて言つたんです。だから、舒明天皇の時、聖徳太

子は太子に格下げされたというわけです。格下げされてどうしたかというところ、今まで釈迦天皇のために釈迦像を作った。今度は格下げされたから、弥勒菩薩を作るようになったと言いう事です。そういうふうにして、聖徳太子というのは、いろいろな人々の間で重要視されていくのですが、これを『日本書紀』を作ったり、こういうことをやったりする人は、要するに難波の近江系の天皇さんなんです。そうすると、近江の天皇さんというのは、琵琶湖へ入る時、一番最初にあるオキナガタラシヒメ神功皇后。そういう人たちの系統の跡を継いだのが天武天皇だと。そして、天武天皇は聖徳太子を太子にしたんだ。だから、聖徳太子が太子と言われたのはずっと後の話、というふうに考えられるのではないか。

だから、『法王帝説』だとか、古い物の中には聖徳太子のことを「聖徳太子」と書いた物は一つも無い。「聖徳太子」と言い出したのは、日本で一番最初にできた懐風藻という詩集があります。あの詩集の序文にあるのが一番最初です。そういうふうにして、聖徳太子というのはいろいろと、まだ考えなければならぬ事がたくさんあると言いうことです。まだお話しする事もありますが、今日はこのぐらいにしておきます。

了